

「懐かしい未来」へ

瀬戸内国際芸術祭2010が盛況のうちに幕を閉じました。来場者数が当初見込みの3倍以上となり、港や海や島に大変なにぎわいをもたらしてくれるとともに、この芸術祭は、私たちが守るべき大切なものを再認識させてくれた、貴重な機会ともなりました。

舞台となった瀬戸内の島々には、宮本常一が「忘れられた日本人」の中で記している、親にしかられて家に帰ってこない子どもを、島の村人が夜遅くまで総出でそれぞれに心当たりを探す、というような村落共同体的な気分が今でも残っています。そんな島の風情を垣間見させてくれるこぼれ話が、インターネットに書き込まれていました。

「今日唐櫃港で目撃した話…土庄行きへ乗る人が、間違えて宇野行きに乗ってしまいました。離岸して方向転換してるとここで気づいたようで、そのままたたくりと回って戻り、そのお客さんを降ろしているのではないですか！船の係の人も嫌な顔するどころか『よかったなあ！』と笑ってます。面食らっている次の土庄行き待ちの私達に、島のおじさんが『これが小豆島航路やで！』と声を上げて、みんなどっと笑って、その場はとても和やかな空気になりました。次に入港する船が沖に停って待っていて、行き違う船同士が警笛で挨拶しあっている光景にもなんだか和みました」（※）

こんなところに、この芸術祭の成功の要因の一部があったように思えます。総合ディレクターの北川フラムさんも、ブログに「約4年、私はありがたい『海のフラム』でありました。そして少しは宮本常一先生の、『忘れられた日本人』の世界を垣間見れたような気がします」と書いています。

「懐かしい未来」という、大貫妙子さんが芸術祭の音楽イベントで歌ってくれた曲が印象深く残っています。私たちが失ったり、落としたりしてきたものを、未来へ探しに行こう、そして美しい地球を守ろうという歌です。瀬戸内海の美しさ、島の文化の豊かさ、そしてそこに生きる人々の優しさや笑顔などはまさに、私たちが「懐かしい未来」へ探しに行くべき大切なものなのです。この芸術祭は、その旅立ちの大きな契機となる出来事であったように思います。

参考：「忘れられた日本人」（宮本常一著 岩波文庫）

※「mixi」（ソーシャルネットワーキングサービス）の書き込みより引用。